

平成24年度研究協議会資料<<平成23・24年度教育課程研究指定校事業>>

ふりがな 幼稚園・学校名	がっこうほうじん 学校法人 霞ヶ浦学園 つくば国際大学 東風高等学校 (237人)
(園児, 児童生徒数)	

(本研究に係る問い合わせ先)

所在地：茨城県かすみがうら市上土田 690-1

電話番号：0299-59-7516

メールアドレス：sugaya@harukaze.ed.jp

学校のホームページの URL：http://www.ktt.ac.jp/harukaze/hs/

【研究成果のポイント】

- 研究対象教科等：総合的な学習の時間
- 研究のキーワード：自己発見プログラム（傾聴型と活動型）
- 研究成果のポイント：「教師が変われば生徒も保護者も変わる」

【研究の目的, 研究内容】

(1) 研究主題

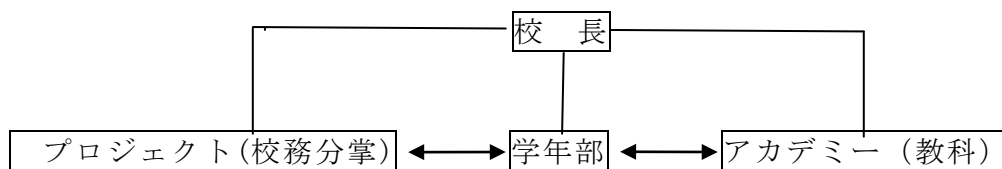
思春期の自分を通して「人間」について探究することによる、主体性、協同的態度の育成のための指導法の確立

(2) 研究主題設定の理由

生徒の自己実現に向けた進路の決定を導くことが、私立・高等学校の大きな課題である。自分に自信を持ち、他者との関わりを深めながら、社会に貢献できる人材育成を目指して、思春期の生徒それぞれが自分を見つめ、他者、ひいては人間そのものを探究する過程（自己発見プログラム）によってその達成を図ることをねらいとする。

(3) 研究体制

学校長を中心として、運営において学年部、プロジェクト、アカデミーが連携して行う。



(4) 2年間の主な取組の経過

平成23年度	「傾聴」「活動」「発表」の3部で構成する。 ①「傾聴」は、「自分」「他者」「キャリア」といったテーマを探究する。 ②「活動」は、学校内・外における体験・調査活動にあたる。 ③「発表」は、口頭、レポート、ポスター、プレゼンテーション等を行う。
1 学年	<ul style="list-style-type: none"> ①「感情」「表情」等についての探究 ②「自己発見学習」（校外研修）の実施 ③文化祭でのポスター展示発表
2 学年	<ul style="list-style-type: none"> ①「アイデンティティの獲得・確立」「新しい自分」等についての探究 ②カナダ感動体験学習の実施 ③プレゼンテーション発表
3 学年	<ul style="list-style-type: none"> ①「富士山に登ろう」「キャリアー志は高く」等についての探究 ②「夢ナビライブ」（キャリアガイダンス）への参加 ③レポート作成

平成24年度	平成23年度の①「傾聴」中心から②「活動」③「発表」重視へと改善を図る。
1 学年	①②に加え、③「発表」では個人レポート作成、クラス内口頭発表、一般の方向けにグループによるポスター展示発表を行う。
2 学年	①に加え、②「発表」では「ディズニー研修」「カナダ感動体験学習」の実施後、③「発表」では個人レポート作成、学年全体でのグループによるプレゼンテーション、一般の方向けに有志グループによる発表を行う。
3 学年	①に加え、②「活動」では各教科との連携による情報収集の後、③「発表」ではクラス単位でグループディスカッションによる協議・口頭発表を行う。
1・2 学年合同	「キズナ強化プロジェクト」への参加、グループによるプレゼンテーション（英語）発表を学校内全体、海外の公共機関及び学校大学にて行う。

(5) 具体的な研究内容・方法、研究を進める上での工夫点等

アウトプットの重視：インプットの作業に相当する「傾聴」中心、教師先導型の形式から、生徒主体の「活動」「発表」のアウトプット中心、教師の支援型の形式へと改善を図った。

- ・レポートによる文章表現、口頭による発表、映像を用いたプレゼンテーションでは日本語・英語による発表を取り入れた。
- ・ディスカッションや話し合いでは、ブレインストーミングやKJ法等のシンキングツールを活用した。
- ・テーマや企画に応じて、個人やグループ活動、発表においてもその対象をクラス・学年・全校・一般と変化・段階を設けた。

授業・学校行事と総合的な学習の時間との連続：総合的な学習の時間を学校運営における中核として位置づけ、教科及び学校行事を統括するものとして連続を図り、相互に教育効果の向上をねらうため、プロジェクト・学年部・アカデミーとの連携を密にした。

- ・レポート作成では、国語科、ディスカッションでは地歴・公民科、プレゼンテーションの作成では情報科との連携を図り取り組んだ。
- ・1学年の校外研修、2学年のカナダ感動体験学習、キャリアプロジェクトによる「夢ナビライブ」、国際教育プロジェクトによる「キズナ強化プロジェクト」の参加を通じ、体験型から探究型へと内容の充実を図った。

【研究成果とその意義等】

(1) 研究成果と課題

教員間の連携が強化され、生徒においては内省を促し、自己肯定感を持ち、問題解決力の向上が見られ、さらに子どもの成長によって、保護者においても学校理解を深め、協力的となるといった教師・生徒・保護者それぞれの意識の変化が見られた。

年間計画において、体験型から探求型への内容と継続性と連続性をもつよう更なる改善を図る。生徒における具体的な達成目標の設定と適正な評価基準を確立する。教師における生徒支援の範囲と手法を明確化する。可能な限りにおける教育効果や成果を可視化、数値化し検証を加え、さらなる共通理解を図ることが課題である。

(2) 研究成果の意義等

学校運営の活性化：教員研修の機会として、教員のスキル向上が、教科指導、生徒指導の充実をもたらす。教員、各部間の連携による組織の充実が、進学実績の向上と生徒募集の増加につながる。自己発見プログラムによる生徒の問題行動の改善が期待される。

(3) 指定期間終了後の取組

引き続き改善を加え、高等学校における研究実践校として、「傾聴」やグループワーク活動、プレゼンテーションの発表といった取組とその成果を一般公開し、外部に情報発信をすることで、校内外の教員研修の場を、また保護者を含む一般の学校理解の機会を提供していく。